

新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

ブラームス:ハンガリー舞曲集(全曲)

クラウディオ・アバド(指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

シューベルト:アルペジオーネ・ソナタ

シューマン:幻想小曲集/民謡風の5つの小品

ミッシャ・マイルスキー(チェロ)

マルタ・アリゲリッチ(ピアノ)

エソテリック(株)独占販売 2019年6月20日 発売

ブラームス:ハンガリー舞曲集(全曲)

クラウディオ・アバド(指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

- 品番:ESSG-90200
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222759
- レーベル:DEUTSCHE GRAMMOPHON
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:管弦楽曲



シューベルト:アルペジオーネ・ソナタ

シューマン:幻想小曲集/民謡風の5つの小品

ミッシャ・マイルスキー(チェロ)

マルタ・アリゲリッチ(ピアノ)

- 品番:ESSD-90201
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222766
- レーベル:DECCA
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:室内楽曲



- DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2チャンネル・ステレオ[マルチなし]
- 美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤3作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この3作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



ブラームス：ハンガリー舞曲集(全曲)
クラウディオ・アバド(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ウィーン・フィル史上唯一の「ハンガリー舞曲集」全曲録音。

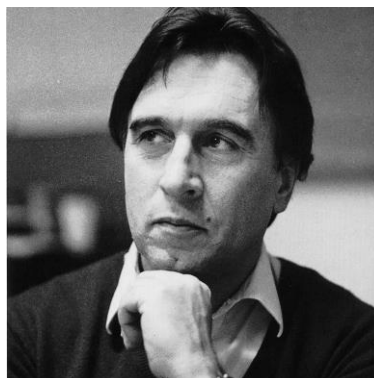
■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。今回はデジタル時代初期に生み出されたドイツ・グラモフォンと旧フィリップスの名盤2タイトルを Super Audio CD ハイブリッドで発売いたします。

■アバド巨匠時代の到来

惜しくも2014年1月20日、80歳で亡くなったイタリアの名指揮者クラウディオ・アバド(1933-2014)。

興味深いことにアバドの活動はほぼ10年単位で区切られています。例えば1970年代はミラノ・スカラ座とのオペラ上演で、1980年代前半はロンドン交響楽団とのコンサート活動でそれぞれ一時代を築き、1980年代後半にはウィーン国立歌劇場音楽監督として、ウィーンという街とのきずなを深め、1990年代のベルリン・フィル時代へとつながります。その中で、1980年代は、50歳台をむかえたアバドがちょうど巨匠指揮者として大きく開花する時期で、録音面でもウィーン・フィルとのベートーヴェン交響曲全集、ヨーロッパ室内管とのシューベルト交響曲全集、シカゴ響とのチャイコフスキー交響曲全集を実現させ、オペラの全曲盤を複数制作するなど、その音楽作りの破格の充実ぶりが多数のディスクに刻み込まれています。



■ウィーン・フィルとの貴重なハンガリー舞曲集全曲



アバドのそうした「充実の80年代」の到来を高らかに告げたアルバムの一つが、この1982年にウィーン・フィルと録音されたブラームスのハンガリー舞曲集(全曲)といえるでしょう。これはもともと1983年のブラームスの生誕150年を記念して、ブラームス所縁のハンブルクに本社を置くドイツ・グラモフォンが威信をかけて企画した「ブラームス大全集」の1枚として発売されたもので、同全集中のシノーポリ/チェコ・フィルのオーケストラ付き声楽曲集、ツィメルマンのピアノ・ソナタ全集、イェーナ/北ドイツ放送合唱団による無伴奏合唱曲全集などと並ぶ新録音として同全集に投入される目玉のアルバムでもありました。長い歴史を誇るドイツ・グラモフォンにとってもオーケストラによるハ

ンガリー舞曲全曲録音はこのアバド盤が初めてであり、またウィーン・フィルにとっても同曲集を全曲録音するのはこの時が初めてで(そして現在にいたるまで同フィル唯一の全曲盤)、二重の意味で貴重な録音でもありました。

■LP 時代から定評があったアバドのブラームス

アバドによるブラームス録音は、これ以前のアナログLP時代に、4つのオーケストラを振り分けたブラームスの交響曲全集および管弦楽曲集(=ドイツ・グラモフォン創立75周年企画でもありました)があり、堅固な形式感を持ち、若々しい覇気と歌心に満ちた演奏が高く評価されていましたし、デッカにはニュー・フィルハーモニア管を振った秘曲「リナルド」と「運命の歌」もあり、ブラームスの音楽との相性の良さは証明済みでもありました(この後のベルリン・フィル時代に完成させた交響曲全集は当シリーズで2018年12月に発売済み)。このハンガリー舞曲集は、そうしたブラームスとの親和性をさらに強く感じさせる演奏であり、急激なテンポの変化や特定のフレーズの強調といったような、民族主義的・ジプシー的な変化球的要素をあまり持ち込まず、むしろストレートで純音楽的かつシンフォニックなアプローチを行なっているところが目(耳)を惹きます。オーケストレーションは、ブラームスも含め計7名の編曲者によっていますが、それぞれの差異を際立たせるのではなく、むしろ平均化したアプローチによって全体としての統一感を出しているのもこの演奏の特徴といえるでしょう。そしてそのアバドの音のキャンバスを豊かに彩っているのがウィーン・フィルの濃密なサウンドで、特にオーボエやクラリネットのチャーミングな木管の個性的な響きが印象に残ります。



■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

このハンガリー舞曲集がアバドのドイツ・グラモフォン録音の中で特異な位置を占めているのは、卓越した演奏であるということのほかに、1950年代後半から英デッカがウィーン・フィルの録音にほぼ独占的に使用してきたゾフィエンザールで収録されていることが挙げられるでしょう。しかも(例えばバーンスタインのCBSへの「ファルスタッフ」や「ばらの騎士」のように)録音自体をデッカのスタッフに任せるのではなく、録音に当たってはアバドの盟友だったプロデューサーのライナー・ブロックが率いるドイツ・グラモフォンのチームがゾフィエンザールに乗り込んでいることでしょう(グラモフォンによるゾフィエンザール録音は、1983年2月のマゼール指揮の「ツァラトゥストラはかく語りき」「マクベス」があるくらいで、極めてまれ)。残響の多いムジークフェラインザールと違って、木質で温かみがありながらも明晰な響きで収録できるゾフィエンザールの特性を生かしつつ、デッカほどには各声部をクローズアップすることなくオーケストラ全体の響きに溶け込ませているのは、グラモフォンの名エンジニア、クラウス・ヒーマンならではのサウンド志向を貫いたものと申せましょう。それによってアバドの引き締まったスリムな音作りの魅力が生かされる形になっています。もともとが優秀なデジタル録音であり、リマスターは2005年に



一度OIB化されたのみであったため、今回は初めてのDSDリマスタリングとなります。今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■「ハンガリー・ジプシーの土臭さとは無縁のシンフォニックな演奏」

「ハンガリー・ジプシーの土臭さとは無縁のシンフォニックな演奏である。ほとんどの曲がブラームス以外の編曲なのにもかかわらず、アバドはあたかも交響曲の総譜を扱うような態度で正確に音化しているが、歌わせ方が自然なせいか、窮屈な感じは与えない。ウィーン・フィルが、やや速めなアバドのテンポ制定の中で多彩なニュアンスを付けているのも見逃せない。」

(『クラシック・レコード・ブック VOL.2 管弦楽曲編』、1980 年)

「ブラームス自身によるピアノ連弾からの編曲のほか、計 7 人の手になるオーケストレーションによって全曲を演奏している。アバドはこれらのスタイルの差を恐らく意識的に狭めて全体の統一を図っている。比較的誇張のないテンポ、巧妙なオーケストラの扱いと音楽面でも一貫したアプローチ、ウィーン・フィルの艶やかな響きと生気に満ちた表現が 21 曲に統一された美しさを与えている。」

(『クラシック CD カタログ 89』、1989 年)

「アバドは効果目当てにテンポを派手に動かすことこそしないが、巧みな歌い口でこの親しみやすい曲集を存分に盛り上げており、美しさと厚みを兼ね備えたウィーン・フィルのサウンドも魅力的だ。編曲譜の差異を際立たせるのではなく、全曲に統一性を見出そうとしていた点も新鮮であった。」

(『クラシック不滅の名盤 1000』、2007 年)

「50 歳直前のアバドがウィーン・フィルと録音したこの全曲は、どの曲の洗練された演奏である。彼の現代的な感性で再度洗い直した新鮮さがこの演奏の魅力といえるだろう。ローカルな感触はなく、どの曲も都会的でスマートに進んでいく。むしろアバドの音楽的抑揚やテンポのメリハリある緩急の切り替えなどはどれも徹底しているが、一世代前の大指揮者が行ったような部分的デフォルメや極端なアゴーギクはここにはない。スコアに書かれた指示を忠実に守り、原典主義ともいえるようなストイックな中にこの曲の純粋な生命感を作り出している。このアバドの解釈に対するウィーン・フィルの鋭い反応も見事で、鮮やかなアンサンブルだ。」

(最新版 クラシック名盤大全 交響曲・管弦楽曲編(上) 2015 年)

「戻りたいスタンダード、とう存在感を持つ盤。ブラームス本人による編曲を含め、ドヴォルザークやパーロウ、ガルなどによるオーソドックスな編曲で 21 曲全部を録音してくれたことももちろん、何しろ演奏が上質。オーケストラの響きだけで楽しめるが、民族舞曲風に寄せすぎず、しかし巧みな語り口で「演出」してゆく絶妙な中庸が全曲を飽かさず聴かせるあたり、アバドのすごさをしみじみ感じる。」

(『最新版クラシック不滅の名盤 1000』、2018 年)

ヨハネス・ブラームス (1833-1897)

ハンガリー舞曲集

- | | | | |
|------|--------|------|--------------------------|
| [1] | 第 1 番 | ト短調 | アレグロ・モルト |
| [2] | 第 2 番 | ニ短調 | アレグロ・ノン・アッサイー・ヴィヴァーチェ |
| [3] | 第 3 番 | ヘ長調 | アレグレット |
| [4] | 第 4 番 | 嬰へ短調 | ポコ・ソステヌート・ヴィヴァーチェ |
| [5] | 第 5 番 | ト短調 | アレグロ・ヴィヴァーチェ |
| [6] | 第 6 番 | ニ長調 | ヴィヴァーチェ |
| [7] | 第 7 番 | ヘ長調 | アレグレット・ヴィーヴォ |
| [8] | 第 8 番 | イ短調 | プレスト |
| [9] | 第 9 番 | ホ短調 | アレグロ・マ・ノン・トロポ |
| [10] | 第 10 番 | ヘ長調 | プレスト |
| [11] | 第 11 番 | ニ短調 | アンダンティーノ・グラツィオーソ・ヴィヴァーチェ |
| [12] | 第 12 番 | ニ短調 | プレスト |
| [13] | 第 13 番 | ニ長調 | アンダンティーノ・グラツィオーソ・ヴィヴァーチェ |
| [14] | 第 14 番 | ニ短調 | ウン・ポコ・アンダンテ |
| [15] | 第 15 番 | 変口長調 | アレグレット・グラツィオーソ |
| [16] | 第 16 番 | ヘ長調 | コン・モート |
| [17] | 第 17 番 | 嬰へ短調 | アンダンティーノ・ヴィヴァーチェ |
| [18] | 第 18 番 | ニ長調 | モルト・ヴィヴァーチェ |
| [19] | 第 19 番 | ロ短調 | アレグレット |
| [20] | 第 20 番 | ホ短調 | ポコ・アレグレット・ヴィヴァーチェ |
| [21] | 第 21 番 | ホ短調 | ヴィヴァーチェ |

オーケストラ編曲:ヨハネス・ブラームス(第 1 番、第 3 番、第 10 番)、ヨハン・アンドレアス・ハレン(第 2 番)、パウル・ユオン(第 4 番)、マルティン・シュメリング(第 5 番～第 7 番)、ハンス・ガル(第 8 番、第 9 番)、アルバート・パーロウ(第 11 番～第 16 番)、アントニン・ドヴォルザーク(第 17 番～21 番)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮:クラウディオ・アバド

[録音]1982 年 4 月 5 日、6 月 1 日～2 日、ウィーン、ゾフィエンザール

[初出]

2560100(1983 年)

[日本盤初出]

ブラームス大全集-1/交響曲・管弦楽曲の 1 枚として:00MG0505～11(7 枚組)(1983 年 6 月 25 日)

単独:28MG0573 (1983 年 9 月 1 日)

[オリジナル・レコーディング]

[レコーディング・プロデューサー]ライナー・ブロック

[バランス・エンジニア]クラウス・ヒーマン

[エディティング・エンジニア]クリストファー・オールダー

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生 小石忠男

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



シューベルト:アルペジオーネ・ソナタ シューマン:幻想小曲集/民謡風の5つの小品

ミッシェル・マイスキー(チェロ)
マルタ・アリゲリッチ(ピアノ)

マイスキーの西側での名声を決定づけた84年の「アルペジオーネ」、世界初 Super Audio CD 化。

■ ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高品質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。今回はデジタル時代初期に生み出されたドイツ・グラモフォンと旧フィリップスの名盤3タイトルを Super Audio CD ハイブリッドで発売いたします。

■ 苦労人マイスキー

ミッシェル・マイスキーは1948年、旧ソ連のラトヴィア生まれのチェリスト。キリストを思わせる風貌、ステージ衣装も通常の燕尾服ではなくイッセイ・ミヤケを愛用し、極めてロマンティックで熱い音楽を聴き手に届ける音楽家として、70歳を過ぎた現在も第一線で活躍しています。1965年の全ソ音楽コンクール1位、66年のチャイコフスキー・コンクール6位となり、ロストロポーヴィチに才能を認められながらも、ユダヤ系ロシア人であったがゆえに反体制的人物とみなされ約2年間の強制労働を余儀なくされました。1972年になってようやく出国許可が下り、アメリカに渡ってピアティゴルスキーに師事し、翌73年のカサド国際コンクールで1位となってようやく国際的な注目を集め、74年にはマールボロ音楽祭に参加、76年にはロンドン・デビューを飾るなど、世界的な演奏活動を開始したのです。



© Susesch Bayat / DG

■ マイスキーを国際的なスターダムに押し上げた「アルペジオーネ」

マイスキーのソロ・デビュー盤は1981年にアルゲリッチとEMIに録音したフランクとドビュッシーのチェロ・ソナタで、同時期にロンドン・シンフォニエッタとの共演でハイドンのチェロ協奏曲をリコルディに録音しています。しかし真の意味でマイスキーの名を世界の音楽ファンに轟かせたのは、1982年ドイツ・グラモフォン録音のバーンスタイン/ウィーン・フィル、クレーメルと共演したブラームスの二重協奏曲と、この84年フィリップス録音の「アルペジオーネ・ソナタ」の2枚でした。前者はバーンスタインの濃密な音楽作りの中で切れ味鋭いクレーメルの個性を受け止めるような包容力ある演奏が心を打ち、後者はマイスキーの本領である深いロマンティシズムの世界を臆することなく表現し尽くし、ロストロポーヴィチ以来長らく音楽界に欠けていた骨太のロマン派チェリストの登場を強く印象付けたのです。そしてこの84年以降、バッハの無伴奏全曲を皮切りに、ドイツ・グラモフォンと専属契約を結んだマイスキーは、続々と新しいアルバムを発表、チェロの主要レパートリーのみならず、世界的なベストセラーとなった「ララバイ」「アダージョ」「チェリッシモ」などコンセプト・アルバムも手掛け、その人気は今も衰えを知りません。

■アルゲリッチと極めたロマン派の神髄

「アルペジオーネ・ソナタ」では、第1楽章冒頭の主題から遅めのテンポでたっぷりとチェロを歌わせ、シューベルトの歌心の深さを体感させてくれます。自らの感情をたっぷり盛り込み、主情的に連綿と歌い続けるその演奏スタイルは、同世代のヨーヨー・マらの爽快かつ健康的なチェロとは対照的で、「あたかも19世紀のチェリストが現代風に洗練された感覚を身につけて私たちの前に蘇ってきたかのような」とさえ評されたほどです。しかしその溢れんばかりのロマンティシズムを空虚なものとしなのがマイスキーの高い音楽性で、人生の「切なさ」を身をもって体験してきた彼ならではの人間性が滲み出ているのです。さらにピアノのアルゲリッチがそうしたマイスキーの音楽性に全面的な共感を寄せ、ぴったりと寄り添い、あるいは自らリードしていくかのような共演ぶりも見事で、「幻想小曲集」のフィナーレでの情熱の迸りや、「民謡風の小品」における各曲のキャラクターゼーションの鮮やかな描き分けなど、この二人が作品に盛り込まれたロマンティックな感情の移ろいをこれ以上ないほどに実在の音としていくさまが生々しく記録されています。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

このアルバムの録音はスイス北西部、ジュラ山脈の麓のフランス国境近くに位置する小さな町ラ・ショー＝ド＝フォンにあるサル・ド・ムジック(音楽ホール)で行われました。ここは1955年に開館した約1,200席を擁する室内楽向けのホールで、1962年にはアメリカの建築士レオ・ルロイ・バラネクが「ホールのどこに座っていても、ステージ上で針が落ちる音さえ聴こえる」と評し、世界で最も優れたホールの一つにあげているほどです。1960年代から主にフィリップスが録音用に使い始め、イ・ムジチ、イタリア弦楽四重奏団、グリュミオー、シェリング、ヘブラー、ホリガー、アラウらの名盤・名録音を通じて、レコード・ファンには「名録音の代名詞」としてお馴染みの会場です。プロデュースを手掛けたのはフィリップスのフォルカー・シュトラウス(1936-2002)。録音会場の床を一度踏みしめるだけでその会場が録音に適するかどうかを見極められる耳の持ち主で、同レーベルでハイティンク、マリナー、コリン・デイヴィスなどの600枚近くのアルバムを制作した伝説のプロデューサーです。チェロとその後ろに置かれたピアノを大きめの音像で明晰に収録しつつ、静寂が保たれたホール内にしっとりとした情感を漂わせるサウンド作りは名手ならではの。もともとが優秀なデジタル録音であったためこれまでリマスターされることはなく、今回が初めてのDSDリマスターングとなります。今回のSuper Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスターングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスターングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■「強烈な個性を持つ2人の演奏家による、他の追随を許さない素晴らしいアンサンブル」

「強烈な個性を持つ2人の演奏家の組み合わせによって、楽しめる要素を多く含んだ演奏。マイスキーは進境著しく、実にロマンティックな歌いぶりを見せている。「アルペジオーネ」ではどちらかといえばアルゲリッチがリードしている感のあることは否めないが、激しい自己主張を示す一方で、優しく包み込むような暖かさものぞかせている。シューマンの魅力的な小品2曲は、ロマンティシズムが全面に出されながらも、やはり個性的で興味深い演奏である。」

(『クラシック・レコード・ブック VOL.5 室内楽曲編』、1980年)

「ソ連出身のマイスキーは、チャイコフスキー・コンクールで入賞し、ロストロポーヴィチに師事した。そのテクニックは素晴らしく、しかも細かい心づかいが行き渡っている。「アルペジオーネ」では全体をリードしているのはアルゲリッチで、開始部などまことに大胆。シューマンではふたりのロマン的情熱が一致している。」

(『クラシック CD カタログ 89』、1989年)

「当局即妙のアンサンブルを聴かせる。マイスキーは、この柔軟な感性と溢れるような歌心で、かなり大きなテンポの伸縮や大胆なダイナミックの変化を付けているが、それを決して恣意と感じさせないのはさすがだ。この演奏の訴求力が強いのは、彼のシューベルトに対する思いの深さが、この作品の深みのある抒情を見事に掬い上げているからである。しかもその淀むことのない見事なテクニックがそれをしっかりと支えている。アルゲリッチはこの作品の性格上、いつもに比べれば控えて前面に立つことは

ないが、随所に即興性あふれる躍動や敏感な反応を見せ、味わい深い共演を果たしている。」
(『クラシック不滅の名盤 800』、1997 年)

「強烈な個性を持つ 2 人の演奏家は、相変わらず他の追従を許さない素晴らしいアンサンブルでファンを楽しませてくれる。どちらかといえばアルゲリッチがリードしている感は否めないが、自己を主張する一方で、マイルスキーを引き立てるような暖かい仕草も見せており、シューマンの 2 作にも優しいロマンティズムが強く押し出されている。」(『クラシック不滅の名盤 1000』、2007 年)

「マイルスキーが西側で活躍し始めて間もないころにアルゲリッチと録音したこのアルバムは、彼の西側でのチェリストとしての存在感を一気に高めた。アルゲリッチの高揚感に満ちた刺激的で鮮烈な音楽が、シューベルトの音楽にかつてない新鮮さをもたらしているが、マイルスキーはその音楽に的確に対峙しながらも、自らの少し翳りを帯びた情感を一杯に湛えた音楽を遺憾なく発揮して、独自のロマン的世界を生み出している。シューマンの方は、アルゲリッチが得意とする作曲家だけにより濃密な音楽が奏でられているが、マイルスキーもここでは互角に対峙して非常に緊張感と切れ込みの鋭い音楽を奏で、スリリングな味わいにあふれる演奏を実現している。」(『最新版クラシック不滅の名盤 1000』、2018 年)

[収録曲]

フランツ・シューベルト (1797-1828)

アルペジオーネ・ソナタ イ短調 D.821

- [1] 第 1 楽章 アレグロ・モデラート
- [2] 第 2 楽章 アダージョ
- [3] 第 3 楽章 アレグレット

ロベルト・シューマン(1810-1856)

幻想小曲集 作品 73

- [4] 第 1 曲 やさしく、表現をもって
- [5] 第 2 曲 生き生きと、軽く
- [6] 第 3 曲 急いで、炎のように

民謡風の 5 つの小品 作品 102

- [7] 第 1 曲 ユーモアをもって
- [8] 第 2 曲 ゆっくりと
- [9] 第 3 曲 早くなく、たっぷりとした音で演奏して
- [10] 第 4 曲 急がずに
- [11] 第 5 曲 力強く、はっきりと

ミッシャ・マイルスキー(チェロ)

マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)

[録音]1984 年 1 月 7 日～10 日、スイス、ラ・ショー・ド・フォン、サル・ド・ムジーク

[初出]

4122301(1985 年)

[日本盤初出]

25PC5160、32CD210(1985 年 7 月 1 日)

[オリジナル・レコーディング]

[レコーディング・プロデューサー]フォルカー・シュトラウス

[レコーディング・エンジニア]セース・ヘイコーブ

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生 小林利之

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

AVお客様相談室

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242
受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00 (土・日・祝日・弊社休業日を除く)